

論文の要旨

論文題目 日本語の動詞の習得をめぐる一考察
- 第二言語習得の基礎的研究：習得理論の試案 -
氏名 寺田裕子
学位 博士（文学）
授与年月日 平成 15 年 4 月 10 日

本論文は、日本語を母語とする子供・母語話者である大人・第二言語として学ぶ留学生・日本で働きながら習得する就労者の各発話資料から動詞句を抜き出し、独自の観点からそれを記述し、得られた結果から日本語の動詞習得のメカニズムを理論的に説明しようと試みた論文である。

以下の3点で、本研究は従来の日本語習得研究とは異なった独自の観点を持つ。

(1)記述研究を行い、その結果得られた事実をもとに習得の仕組みを説明する言語習得の理論構築を目指そうとした研究である。従来の日本語を第二言語とする習得研究は、主に記述的な観点から分析するものが多く、なぜその結果が得られたのかを説明する理論構築を目指す観点が欠けていた。その意味で本研究は、得られた結果を Pinker, Snyder などの習得仮説を援用し、習得理論仮説を検証した。(2)日本語を母語として習得する子供の発話と第二言語学習者の発話の双方を視野に入れ、日本語の習得に共通する性質を明らかにしようという観点から、動詞の習得過程を詳細に記述した。その意味において独自の分析がなされている。また、学習者の言語データとして、留学生の縦断・横断データ、就労者の縦断データを比較し、又子供の母語習得データとも比較し、多様な学習者と、母語話者の習得とを合わせて比較記述した研究であり、その意味で前例がない研究であるといえる。(3)これまでに日本語の動詞の活用形を含め、さまざまな形態素がどのように習得されるのか、多様な動詞の活用形、形態素がどのように生産的に使用されるようになるのかを扱った体系的な研究は行われていない。従来、習得段階を数量化するとき MLU（平均発話長）や、それに準ずる言語単位が用いられるのが一般的であっ

た。しかし、筆者は、MLU が欧米諸語系の言語の文法の発達を計るために考案された指標であるため、膠着言語である日本語に応用することに疑問を呈し、それに代わる新たな発達指標として動詞句の mor-2 を提示し、膠着言語である日本語の特質を反映した習得指標の試案を示した。

以上の3点が、本研究の意義、また研究目的として特筆できる点である。

以下で、各章の概要を述べる。

第1章では、上に述べた研究の意義と目的が述べられている。第2章では先行研究と本研究で援用されている生成文法の仮説の概要を述べ、また第二言語習得研究の基本となる中間言語仮説についてその定義の重要性を論じている。第3章は、発話資料を詳細に分析した記述研究である。研究対象者は、

- a.日本語を習得する子供1人、
- b.日本語の母語話者(20歳以上の成人3人)
- c.日本語を学習する留学生(20歳以上の成人の縦断・横断データ)
- d.日本語を学習する就労者(20歳以上の成人の縦断データ)

である。

各グループの? データのタイプ? 調査対象? 発話収集の方法は以下の通りである。

- a. (1) 宮田(1998)で公開されている発話データの一つを使用、動詞形態素のコードは、JMOR(中・宮田, 1999)の修正版を用い、出現頻度等の分析には CLAN プログラムを用いた。(2) 1名の男児の1歳3ヶ月から3歳までの発話。(3)自宅自由遊びの場面を撮影、録音したもの。b. (1) 漫画を使ったストーリーテリングの独話の発話データ (2) 日本語の母語話者(男1名・女2名)(尾崎 1996 で収集) (3) 独話の発話をテープに録音、書き起こしたもの。c. b. (1) に同じ (2) 名古屋大学の留学生4名(尾崎 1998)と東海大学の留学生7名 (3) 名古屋大学のデータは、6ヶ月の日本語研修コースを終了した直後の学生を対象に、その後3ヶ月おきに2年間にわたって収集された縦断データ。東海大学のデータは、アメリカ人の留学生で、日本に来日後2ヶ月の時点で、収集した横断データ。d. b. (1) に同じ (2) 日系ペルー人の就労者、男女9名の発話データのうち男女1名ずつの発話を分析対象とした。? 独話の発話をテープに録音。発話後、発話意図を確認

するため、スペイン語の発話も収集。

本研究で採用された動詞の記述方法を述べる。動詞はその語幹に1つ以上の形態素が連鎖すると考え、語幹を stem, 動詞句末の形態素を mor-last, その直前の形態素を mor-2 とし、その連鎖で動詞句を記述した。結果を詳細に記述し、母語話者の子供と大人、母語話者と日本語学習者など、さまざまに比較分析した。

以下で分析の結果を述べる。

(1) mor-last の分析結果

(1) 日本語の母語話者は、4つの活用形「現在形/過去(た)形/て形(連用用法)/連用形」を多用することがわかった。一方、日本語学習者は、習得が進むほど、mor-lastの形式の中でも上記の4つを使い分け、母語話者の発話に近づいていく。

(2) また、一発話の構成が単文または複文かという観点から習得の段階を示唆した。学習者には、a)「と言う」「と思う」のような特定の動詞と結合した複文構造の発話のみの段階がある。次に、b)「て形」等活用語尾形、あるいは「ので・けれども」など「理由・逆接」など補文接続を表す形態素を用い、[単文]+[単文](例:ごはんを食べたので眠くなった)の複文で構成される発話段階へと変化することがわかった。しかし、c)母語話者のように、埋め込み構文を用いる複文(例:母は、父が書いたメモを読んだ)は、学習者の発話では見られなかった。そこで、埋め込み構文使用がさらなる段階として予測できるとしている。

以上、一発話の複文構造を分析することで学習者の習得度が推察されると述べた。

(2) mor-2 の分析結果

習得が進むと、mor-2 で多くの形態素を使用し多様に組み合わせることがわかった。また、「て形+補助動詞」の使用も習得が進むほど mor-2 に多く出現した。

学習者の発話を段階的に見ると mor-2 が、? 「たべます」のように「pol ます」「neg

ない」(pol,neg, pol+neg)が主に使われる段階、? 「pol ます」「neg ない」以外の形態素(des, rare など)が使用され多様化していく段階、? さらに複雑に組み合わせられていく段階(たべられています rare+tei+pol, nakutewanaranai, tei+pol)、また「て形+補助動詞」を生産的に使う段階という発達過程が観察された。

以上の結果から、mor-2 は習得を反映する部分と言えそうである。しかし、習得があるレベルに達すると発話は簡潔な表現になる傾向が見られ、形態素の組み合わせや種類など数量分析上、数字の上昇が頭打ちになる結果を示すものもあったとしている。その意味で、mor-2 は習得段階の限られたレベルに有効な指標であり、一定の段階まで達した学習者については、平行して別の基準でも考えていく必要性を述べている。

(3) stem の分析結果

語幹部分の複合化に注目し、母語話者が語幹部分で意味の簡潔化をはかっていることを特筆した。日本語は意味概念を動詞として語彙化し、形態的複合が多用される点で特徴的と指摘されている。その点から筆者は複合動詞を使用できることが文法能力の1つの指標になる可能性があると考え、得られた結果について、さらに続く第4章、第5章で習得仮説を検証し習得のメカニズムについて説明を試みると結論づけた。

第4章は、複合動詞についての考察である。日本語の複合動詞は、言語的な観察事実から二類に区別される。その理由は日本語の文法の中での取り扱いの違いに起因するとする影山、松本等の主張に基づき、二類に区別されるゆえに習得の観点からも異なるメカニズムが働くという仮説をあげ、Pinker等の習得仮説を援用し、日本語複合動詞の習得の仮説を提示した。そこで、日本語を母語とするが海外で成長した帰国生を対象に、複合動詞の作成・理解・判断テストを行い、仮説検証を行った。得られた結果から、統語的複合動詞は日本語の複合動詞の語形成規則のデフォルトタイプであり、もう一方の語彙的複合動詞はインプットの量に影響される連想記憶を形成するタイプであるという仮説が支持された。

また複合動詞習得の過程で、動詞句の構造上、修飾関係である付加詞より項関係が優先される処理を行う段階が存在する可能性が示唆され、より深い考察を第5章で行っている。5章では、動詞由来複合語の語形成を分析し、複合語の習得の過程で、? 本当に項

が付加詞より優先されて処理されるのか、？なぜ項が優先されるのかの2点について検討している。

動詞由来複合語の理論的な仮説として杉岡を、習得仮説として Snyder, Sugisaki et al の複合語パラメータの仮説を援用した。筆者の主張は以下のものである。複合語パラメータの実態は明らかではないが、日本語の動詞をベースとする複合語作成に際し、項指定の語形成が Pinker 等の主張する規則型だと考えると項情報で合成的に生産的に行われるのに対し、付加詞の情報は意味レベルで行われ、レキシコンに登録されるまで頻度と連想による記憶を作らなければならない連想記憶型だと考えられる。そこで以下のように仮説検証を行った。

- (1) 複合動詞と動詞由来複合語と、どちらも同じ日本語の複合語パラメータに由っている。日本語は項レベルでも語彙概念レベルでも、語形成が行われる。
- (2) 動詞複合語で語彙的 VV を正しく習得している帰国生は、動詞由来複合語も正しく習得している。すなわち、パラメータが正しく習得されているため、どちらの複合語の語形成も間違わない。

海外滞在の長い帰国生 30 名に質問用紙による真偽判定テストを行った。結果は両者の正誤判定結果に有意差が見られ、仮説は支持された。しかし、第 5 章の考察はまだ不十分な点があり、今後の課題が多く残されている。その意味で、1つの習得仮説の可能性を示したに過ぎない。

第 6 章は、本研究のまとめと今後の課題である。

本研究は、日本語話者の発話を記述し、得られた結果から習得のメカニズムを説明する理論検証を行うという点で、従来の第二言語習得研究には見られない研究である。本研究の成果をまとめる。？習得の理論仮説として Pinker 等の「2方向習得モデル」の仮説検証を行い、日本語の複合動詞の習得を説明する仮説として支持する結果を得た。これは Pinker 等の仮説が屈折言語の活用語尾形の習得に関するモデルであるのに対し、筆者が膠着言語の派生語形成にも適用できることを示し、日本語の Complex Predicates 複雑述語の習得研究へ生かされる研究結果となった。？日本語の文法発達研究に対し新たな指

標を提示した。MLU は、膠着言語にそのまま応用できないのではないかと考え、一方で、日本語の動詞は、膠着言語であるゆえ、様々な形態素を付加して、一つの動詞句により広範な意味をもたせることができる点に注目した。その性質を反映した mor-2 を文法発達指標として提案した。

今後、筆者の習得研究結果は、日本語学習者の語彙習得の判定試験として、また中上級レベルの学習者への語彙教材として応用が可能である。